

## 女子新体操採点規則の比較考察 —2017年の規則改正における個人演技の難度評価について—

竹 澤 恵 菜

Comparison consideration of the female rhythmic gymnasts scoring rule.  
—Evaluation of Difficulty of the Individual Exercise of scoring rules revised in 2017—

Ena TAKEZAWA

### I. はじめに

新体操は、フィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングと同様の「採点競技」に分類される。どの競技スポーツにおいても、規則は絶対的なものであり、競技そのものを成立させる基盤であるが<sup>1)</sup>、これらの「採点競技」は、共通して「美しさ」を競い、採点規則を基盤とした、芸術的要素が得点として評価されることを特徴としていることから、「芸術スポーツ」と呼ばれる。新体操の採点規則は、4年に1度をサイクルとして、国際体操連盟（Federation International Gymnastics : FIG）によって見直され、オリンピックの翌年から改正される。その為、指導者は改正される度に、採点規則を十分に把握し、演技の作成や、選手の指導に当たることが求められる。演技は、「難度」と「実施」の2つの視点から評価される。「難度」は、身体運動と手具運動の調和が重要であり、国際体操連盟（FIG）によって定められた難度価値基準に従って、加点法で評価が行われ、「実施」は、手具の落下や身体の表現、多様性、音楽の一致などを減点法で評価される<sup>2)</sup>。また、「難度」と「実施」の合計が最終得点となり競われる。つまり、新体操は、競技性と芸術性のバランスの上に成り立ち<sup>3)</sup>高度且つ、正確に行い、美しさを追求した表現に結びつけることが高い得点に結びつく競技である。

近年、日本の新体操の急成長は目を見張るものがある。2016年8月に開催されたリオデジャネイロ・オリンピックにおいては、強豪国であるロシア、ベラルーシ、ブルガリアに引けを取らない演技を見せ、2017年9月の世界選手権大会では、42年ぶりにメダル獲得を果たした。次の2020年東京オリンピックでのメダル獲得に向け、公益財団法人日本体操協会はさらなる強化の必要性を述べており、強化の方向性として、新体操指導者が取り組むべき重要事項の1つに「採点規則の把握」を挙げている<sup>4)</sup>。

採点規則の改正は、2013-2016年新体操採点規則（旧採点規則）に則って行われた2016年リオデジャネイロ・オリンピックを終え2016年5月にFIGより2017年-2020年採点規則（新採点規則）の英語版が発表された。新採点規則の発表から、実際に適用される翌年の試合までは、半年以上の期間があり、指導者が新採点規則を把握する為の十分な時間が確保されているように思われる。し

かし、日本では採点規則が日本語に翻訳される為、公益財団法人日本体操協会より日本語版が公表されたのは2017年2月であり、日本の指導者達に伝達されてから、わずか数ヶ月でシーズン入りする現状にある。採点規則に関する研究<sup>5) 6)</sup>はいくつかみられるが、2017年に改正された新採点規則に関する研究は殆どされておらず、旧採点規則から新採点規則への改正点や追加項目について明確にし、理解を深めることは、今後の日本の新体操における方向性を探り、指導現場において、有効な基礎資料の提供が可能になると考えられる。

## II. 研究の目的及び方法

本研究では、2020年まで適用される新採点規則の内容において、指導者が理解を深め、今後の新体操における方向性を見出し、指導現場に役立てることを目的とする。

そのための基礎研究として、「難度」の評価項目に着目し、新採点規則における改正点や追加項目を、旧採点規則と比較することで明確にする。また、同時に、改正に伴って求められる新体操の方向性を考察する。

## III. 2013-2016年採点規則における「難度」の評価項目

旧採点規則における、「難度」の採点方法は、申告書の提出によって、申告された演技内容を基盤とし、それらの内容が正しく、明確に行われているかを審判員が評価し、採点する。「難度」の評価は、身体の難度・ダンスステップコンビネーション・回転と投げを伴ったダイナミック要素・手具のマステリーの4つの要素から行われる<sup>4)</sup>。また、これらの要素には手具操作が伴っていることが必須であり、手具操作は手具ごとに基礎技術グループとその他の技術グループに分類されている。表1には、「難度」の各要素における数の基準を示した。

表1. 2013-2016年採点規則における「難度」の各要素における数の基準

身体の難度	ダンスステップ コンビネーション	回転と投げを伴った ダイナミック要素	手具のマステリー
最低6個/最高9個	最低1個	最高3個	最高5個

身体の難度は、3つの身体グループ（ジャンプ・バレー・ローテーション）に分かれており、FIGによって定められた各グループの身体の難度の一覧表の中から、演技する選手の能力やレベルによって、実施する身体の難度を選択することができ、演技中に最低6個、最高9個の身体の難度を実施することが可能である。また、各身体グループの中から、最低2個、最高4個を数の基準として、構成する事になっている。つまり、指導者は演技を構成する際に、各身体グループから2個ずつ身体の難度を選択し、それ以外に選手の能力に応じて実施可能な身体の難度を追加していくことになる。また、正しく明確なポジションで行うことが重要であり、必ず手具操作を伴うことで、得点を獲得する事ができる。

ダンスステップコンビネーションは、2012年のロンドン・オリンピック後に改正された、この

旧採点規則より取り入れられた要素であり、最低8秒間の連続的にひと続きになった手具操作を伴ったダンスステップである。8秒間の長さ、基礎技術グループに分類されている手具操作を最低1個入れることを条件に、最低1個演技中に実施することを数の基準としている。また、ダンスステップコンビネーション、その作品の雰囲気や特徴を表す重要な要素とされており、指導者は選手の動きの特徴に合った音楽、その音楽に合ったダンスステップの振り付けや手具操作を選択する事が求められる。

回転と投げを伴ったダイナミック要素とは、手具を大きく投げ、手具が空中にある間または受ける瞬間に最低2回転以上の身体の内転を行い、落下なく実施することで成立する要素である。最高3個を数の基準とし、FIGによって定められた、回転と投げを伴ったダイナミック要素の追加基準に従って、手具の投げ方や受け方を、視野外や手以外等のリスクの高い方法で行う事や、回転の軸や高さの変更することで、加点され、高い得点を獲得する事ができる。つまり、指導者は、1つでも多くの追加基準を取り入れ、さらに、選手が落下なく正しく行うことができる回転と投げを伴ったダイナミック要素を工夫して選択する必要がある。

手具のマステリーは、特別な手具操作から成り、珍しくユニークなものが求められる手具要素であり、新体操における手具操作の多様性と工夫が特に求められる。FIGによって定められたマステリーの基準に従って、最低1つのベースとなる手具操作と、その手具操作に伴った最低2つのマステリーの基準、または、最低2つのベースとなる手具操作と、その手具操作に伴った最低1つのマステリーの基準のどちらかの構成を行うことで認められる。それらは全て異なった種類や形で、最高5個が数の基準とされている。また、落下や不正確などが少しでも見られた場合は評価されない為、指導者は手具のマステリーにおいて、他の選手が行っていないような新しい手具操作を創造し、生み出していく必要があり、また、それを選手に熟練させることが求められる。

さらに、表2には、手具ごとの基礎技術グループとその他の技術グループに分類されている手具操作の数を示した。身体の難度における4つの要素を組み合わせた演技の中には、基礎技術グループに分類されている手具操作を有意に取り入れなければならない、最低50%の条件を満たしていない場合は、減点が行われる。しかし、表2からわかるように、基礎技術グループに対して、その他の技術グループに分類されている手具操作の数が上回っている場合もある。そのため、指導者は多様性を損なわないように工夫し、基礎技術グループに属する手具操作を多く取り入れる必要がある。

表2. 2013-2016年採点規則における各手具の手具操作グループの数

手 具	基礎技術グループ <sup>1)</sup>	その他の技術グループ <sup>1)</sup>
ロ ー プ	6 個	3 個
フ ー プ	6 個	2 個
ボ ー ル	5 個	2 個
ク ラ ブ	4 個	6 個
リ ボ ン	6 個	3 個

#### IV. 2017-2020年採点規則における「難度」の評価項目







新採点規則における、「難度」の採点方法は、事前に実施する演技内容の申告は行わず、審判員が競技会において、正確に実施できていると判断したものに対して評価され、得点に加えられる。つまり、審判員に「難度」として認識されなかった要素は、選手が行っているつもりであったとしても、評価されないのである。難度の評価は、身体難度・ダンスステップコンビネーション・回転を伴ったダイナミック要素・手具難度の4つの要素から行われる<sup>71</sup>。また、旧採点規則と同様に、これらの要素には手具操作が伴っていることが必須であり、手具操作は手具ごとに基礎手具技術グループと基礎でない手具技術グループに分類されている。表3には、「難度」の各要素における数の基準を示し、表4には、手具ごとの基礎手具技術グループと基礎でない手具技術グループに分類された手具操作の数を示した。

表3 2017-2020年採点規則における「難度」の各要素における数の基準

身体の難度	ダンスステップ コンビネーション	回転を伴った ダイナミック要素	手具難度
最低3個/最高9個	最低1個	最高1個	最高1個

身体難度は、旧採点規則と同様に3つの身体グループ（ジャンプ/リープ・バランス・ローテーション）に分かれており、FIGによって定められた各グループの身体難度の一覧表の中から、演技する選手の能力やレベルによって、実施する身体の難度を選択することが可能である。演技中に、最低3個、最高9個実施することを基準とし、各身体グループの中から最低1個実施することを条件に、構成する事が可能である。つまり、指導者は演技を構成する際に、各身体グループから身体難度を1個ずつ選択し、それ以外に選手の能力に応じて実施可能な身体難度を追加していくことになる。また、審判が見やすく、正しく評価ができるよう、明確なポジションで行うことで、得点を獲得する事ができる。さらに、新採点規則においては、事前に演技内容の申告がない事により、実施予定に関わらず、実施された身体の形が評価されることから、図1のように、レベルダウンした身体難度も評価される<sup>31</sup>。

図1. レベルダウンをして評価する身体難度の例

実施予定であった身体難度	実施された身体難度	レベルダウンをして評価された身体難度
		
実施予定であった身体難度	実施された身体難度	レベルダウンをして評価された身体難度
		

ダンスステップコンビネーションは、旧採点規則の改正時に取り入れられ、今回の新採点規則改正においても継続された。最低8秒間の連続的にひと続きになった手具操作を伴ったダンスステップである。8秒間の長さ、基礎手具技術グループに分類されている手具操作を最低1個入れることを条件に、最低1個演技中に実施することを数の基準とし、追加していく事が可能である。さらに、新採点規則では、追加事項として、ボール、フープ、リボンの演技において、利き手でない手にて最低1つの手具技術要素を行わなければならない。また、最低2つの異なる様式、リズム、方向及び高さを展開し、音楽の特徴を的確に捉え、テンポやリズムにステップに合わせたステップを行い、更なる多様性が指導者に求められる。

回転を伴ったダイナミック要素では、旧採点規則と同様、手具を大きく投げ、手具が空中にある間、または受ける瞬間に最低2回転以上の身体の回転を行い、落下なく実施することで成立する要素であり、最低1個を数の基準としている。FIGによって定められた、回転を伴ったダイナミック要素の追加基準に従って、手具の投げ方や受け方を視野外や手以外等のリスクの高い方法で行う事や、回転の軸や高さの変更することで、レベルの高い得点を獲得する事ができる。また、新採点基礎では、回転要素の軸や高さの変更は1回ずつしか行えないことになった。これによって、指導者は、手具の投げ方や受け方において、回転要素の組み合わせを工夫して構成することが重要となる。また、手具難度は、手具と身体の間と同調性を保つには技術的に難しいもの、興味深い、革新的な手具の使い方と定義されている。FIGによって定められた手具難度の基準に従って、旧採点規則と同様に、最低1つのベースとなる手具操作と、その手具操作に伴った最低2つのマステリーの基準、または、最低2つのベースとなる手具操作と、その手具操作に伴った最低1つのマステリーの基準のどちらかの構成を行うことで認められる。新採点規則では、最低1個が数の基準であり、異なる種類や方法であれば、何個でも追加することが可能である。指導者は、ベースとなる手具操作を正確に選手に行わせ、1つでも多くの革新的な手具操作を生み出し、作品のオリジナル性や新体操の更なる可能性を広げる工夫をすることが求められる。

また、表4には、手具ごとの基礎手具技術グループと基礎でない手具技術グループに分類されている手具操作の数を示した。表4からわかるように、手具操作においては、全ての手具の基礎手具

技術グループが4個に統一され、それらは演技中に必ず取り入れなければならないが、どのタイミングでも実施が可能となった。

表4. 2017-2020年採点規則における各手具の手具操作グループの数

手 具	基礎技術グループ	その他の技術グループ
ロ ー プ	4 個	2 個
フ ー プ	4 個	2 個
ボ ー ル	4 個	2 個
ク ラ ブ	4 個	3 個
リ ボ ン	4 個	3 個

## V. 競技規則の個人競技の「難度」の比較

これまで述べてきた、旧採点規則と新採点規則の難度評価項目について比較し、新採点規則における改正点や追加項目のポイントを把握する。

まず、新採点規則の改正において最も大きな影響と変化をもたらした点は、難度の採点方法である。旧採点規則において、難度の採点方法は、申告書によって申告されている各要素が正確に行われているかを評価し、採点していた為、申告内容と実際に実施された演技に相違がみられた場合、評価されなかった。しかし、新採点規則においては、申告書を使用せず、競技会で実際に実施された演技において、正確に実施できていると判断した難度にのみが評価され、得点が加算されていく。この改正点により、選手は試合当日のコンディションや、演技中のあらゆる状況に対応し、演技をその場で変更することが可能であり、変更された演技が正確に行われていれば、得点として評価されるようになった。

また、各要素の数の基準についても改正されている。身体難度において、旧採点規則では、最低6個、最低9個を基準としているのに対し、新採点規則では、最低3個、最低9個と数の選択の幅が広がっている。また、身体難度の最高9個のうち、各身体グループの数の基準は、旧採点規則では最低2個、最高4個に対し、新最低規則では、最低1個に改正されている。そのため、追加していく身体難度は、その選手が得意な身体グループから多く追加することができ、選手の特徴を十分に生かした難度を選択することができる。

さらに、新採点規則では、身体難度において、レベルダウンをして評価することが認められた。その為、実施予定であった身体難度が明確に行えなかった場合においても、実施できているレベルまでの評価がされるようになり、評価の幅が広がっている。ダンスステップコンビネーションでは、新採点規則において、利き手でない手での手具操作が追加された。これにより、手具の同じ手で保持する時間が短くなり、ダンスステップにおける身体と手具の更なる多様性の幅が広がる可能性がある。回転を伴ったダイナミック要素においては、旧採点規則では最大3個の数の基準に対し、新採点規則では最低1個と、最大数の制限がなくなった。また、手具難度においても、旧採点規則において最大5個の数の基準に対し、新採点規則では、最低1個と改正された。これらの改正ポイン

トにより、選手の能力に限界を作らず、最大限に活かすことができる演技構成が可能になった。また、手具操作において、新採点規則では、それぞれの手具に基礎手具技術グループが4つに統一され、基礎でない手具技術グループは4つより少ない数で分類されている。新体操において、どの手具においても基礎手具操作は重要であり、新採点規則では、演技の中で多様性を生みながらも、基礎手具技術グループが多く取り入れやすく、基礎に忠実な採点規則となった。

## VI. 考察

4年に1度行われる新体操の採点規則改正は、新体操の競技の方向性を導き、可能性を広げる重要なものである。そのため指導者は、改正された競技規則に対して、規則をただ読み取るだけでなく、自分の選手に対して何を強化しなければならないのか、どのような点に時間をかけて指導すべきなのか、改正されたルールに何を求められているのか、を把握し指導することが重要である。新採点規則における改正点及び追加項目から、本研究では、以下のような2点が考察できる。

- 1) 演技内容の申告を行わず、実施した演技を評価される採点方法となった事から、指導者は、これまでより、どのような要素を実施しているのかを明確に判断できる演技構成を行い、また演技中における、あらゆる状況に対応して、減点を最小限に抑える判断や対応力を選手に身に付けさせる指導が必要であると考えられる。
- 2) 難度を評価する各要素において、数の基準の最高数の制限がなくなった事から、演技構成の幅が広がった。そのため、指導者は、選手の個性や動きの特徴、能力を十分に理解し、それを生かした演技構成を行うことが、新採点規則における、有効な演技構成であると考えられる。

## VII. 参考文献

- 1) 橋本真央・太田順康・千住真智子 (2013) 新体操における競技力を高める指導に関する研究—競技者の演技創作に取り組む意識に着目して—  
大阪教育大学紀要62 (1) : 105-115
- 2) 石崎朔子 (2017) 技術と表現を磨く! 魅せる新体操 上達のポイント  
メイツ出版株式会社 : 東京、p13
- 3) 公益財団法人日本体操協会 (2016) 新体操教本  
株式会社コムラ : 東京
- 4) 公益財団法人日本体操協会 (2012) 新体操教本  
株式会社コムラ : 東京、p42
- 5) 小林由美子 (2003) 新体操競技の10点満点の分析・団体競技 (2)  
東京女子体育大学紀要22 : 18-25
- 6) 村田由香里 (2011) 新体操の採点規則に関する哲学的研究—運動特性および競技性と採点規則との適合性を中心に—  
日本体育大学紀要41 (1) : 13-24



- 7) 新体操委員会 (2013) 2017～20120年度版女子新体操採点規則  
(公財) 日本体操協会
- 8) 浦谷郁子 (2011) 新体操における美の理論に関する一考察  
—採点規則との関係において—  
日本体育大学紀要40 (2) : 57-68